

はじめに

関節エコーは、リウマチ診療において病変を可視化し、病態の理解を助ける有用な検査法です。一方で、学びはじめたばかりの頃は、「何を見ればよいのか」「どの所見を重視すればよいのか」「疾患ごとの違いをどう整理すればよいのか」と迷うことも少なくありません。画像は見えているのに、診断や病態理解にどう結びつけばよいのかわからない——そのような戸惑いは、多くの初学者が経験するものだと思います。

本書の特徴は、操作手技上のさまざまなノウハウの紹介とともに、関節エコー所見を3つのステップで整理して捉える点にあります。第1のステップは、**炎症の中心、すなわち病態の首座を見極めること**です。滑膜なのか、腱鞘なのか、付着部なのか、あるいは結晶沈着や骨表面の変化なのかを意識することで、所見の意味が明確になります。第2のステップは、**特徴的なエコーパターンを捉えること**です。滑膜肥厚、液体貯留、ドプラシグナル、骨びらん、沈着物などを、病態を反映したパターンとして捉えることです。第3のステップは、**好発部位を意識すること**です。疾患や病態には生じやすい部位があり、それを知ることで、観察すべき場所が整理され、より効率的で再現性の高い評価につながります。

この3つの視点をもつことで、関節エコーは「画像を探す検査」から「病態を考える検査」へと変わります。最初からすべてを完璧に描出し、判断する必要はありません。炎症の場所を意識し、特徴的なパターンを探し、好発部位を確認する。この流れをくり返すことで、所見は少しずつ確かなものになっていきます。

本書は、北海道内科リウマチ科病院で日々リウマチ診療と関節エコーに携わる医師と検査技師が、初学者でも理解しやすいように作成いたしました。関節エコーを難しい専門技術として遠ざけるのではなく、診療のなかの身近な武器として身につけていただきたい。その思いを込めて、本書を「攻略本」と名づけました。リウマチ診療にかかわるすべての医療者の皆様にとって、本書が関節エコー実践への一歩となり、困ったときに気軽に開いていただける一冊となれば、これ以上の喜びはありません。

2026年8月

北海道内科リウマチ科病院 最高顧問
監修を代表して
小池隆夫